

文献資料  
紹介  
〈第14回〉

屋久島神社調書

承前

山本秀雄

（註）ここに掲げた神社の写真（今号・前号とも）は最近の撮影になるもので、本稿のもととなった鹿兒島県神社本庁所蔵の「神社明細書」の作られた当時（昭和二十年代）のものではありません。

十三、船行神社

大山祇命

屋久町大字船行九番地二

一月十一日（旧曆）

本殿六坪・拜殿六坪

一千七百六十五坪

五十八戸

創立年月日不詳なれども、

往古より現在まで鎮座地を「神山」と通称し、往古は村社として、古来奉祀されたる元官幣社、即ち現在の県社たりし益救神社の末社にして、屋久島全島十八社中の一に相当する古社なり。しかし、官幣社たりし益救神社が明治維新後に社格を失ひてより、当社も亦村社の社格を失ひて現在の如く無格社となるに至れり。

祭 座 地  
大 祭 日  
社 殿 坪 数  
境 内 地 坪 数  
由 氏 子 数  
緒 緒

十四、粟穂神社

天津日高彦火々出見命



粟穂神社

鎮 座 地  
大 祭 日  
社 殿 坪 数  
境 内 地 坪 数

屋久町大字安房浜町七十四番地  
三月三日  
本殿六・二五坪・拜殿十四坪



船行神社

由氏子 二百二十戸

本神社は目下無格社に過ぎざるも、往古は村社として、古来奉祀されたる元官(藩)幣社、即ち現在の県社たりし益救神社の末社にして、屋久島全島十八社中の一に相当する古社なり。しかし、益救神社が明治維新後、藩幣社の社格を失ひて県社に列するに至るや、その後時代の変遷に因り当社も亦村社の社格を失ひて現在の無格社となるに至れり。

十五、盛久神社(盛久権現社、また川向神社ともいう)

主馬判官平盛久

屋久町牧野(旧黒石野村)

旧曆九月十九日(現在は新曆九月十五日)

本殿九坪・拜殿九坪

祭座地 鎮座地 大祭日 社殿坪数 境内地坪数 由氏子

昔、黒石野と呼ばれていた屋久町牧野のイテゴ川のほとりに、平盛久を祭る小祠があつた。何時の頃、盛久が屋久

島に来島し、なぜイテゴ川のはとりに祀られていたのか不明であるが、伝説では、平家の落人を尋ねて南島を廻るうちに盛久はこの地で没し、土地の人に埋葬されたという。その後、村に怪事・災難がつづき、又この社山の樹木に障るものには祟りが多かつた為、現在地に移転したところ怪事は治まったという。盛久が目的の半ばで斃れた無念の思いが靈気となって現われるのか、今日も白馬に乗った武者姿に蹄の音を聞かせるという。

無医村時代は「齒の神様」として知られ、島民の尊崇を集めていた。

移転の年は延享四年(一七四七)九月十九日か、拜殿の奥に、



盛久神社

年月日と『主馬判官盛久神墓』と刻した墓碑を安置する本殿がある。

④ 主馬判官盛久は平家譜代の勇士であった。平家没落の後、京都に隠れていたところを捕われて鎌倉に送られ、刑場の露となるところを、かねて信仰していた清水観音の功德によって不思議にも敵手の太刀折れ、眼くらみて斬ることが出来なかった。そこで頼朝はこれを赦して京都に帰すと云うのが史実である。

尚、盛久権現社は昭和五十二年十月に改築され、境内地に将棋の駒形の自然石で記念碑が建てられている。

その碑文を記せば

平盛久は伊勢国の平盛国の八男で、一族ともに平清盛に仕えていた。壇ノ浦の合戦で源氏に敗れて都にかくれていたが、捕えられ、鎌倉の由比が浜で切られようとしたところ、かねてから信仰心が厚かったので、清水寺千手観音の加護によって助けられたといわれている。

後に天皇(安徳)を慕って南に下り、建仁二年(一一〇二)、硫黄島から屋久島に渡る途中、船の上で病気のため亡くなり、歌江川(現在のイテゴ川)尻に流れ着いた。そこで先に着いた一族は川口附近にていねいにほおむったが、その後、神のお告げによって黒石野村(現在の牧野)に移し、いくさの護り神として長く住民の崇拜するところとなった。

盛久権現社は屋久島の平家史を知るもつとも大事な史蹟である上、観音信仰の権現としてたいへん有名である。

尊い寄附をいただき新築することになったので、これを記念して権現社の由来記を長くとどめ置くものである。

昭和五十二年十月吉日



弓矢八幡神社

十六、弓矢八幡神社  
 祭神 譽田和氣命（応神天皇） 大山祇命  
 鎮座地 屋久町麦生下町七二七番地  
 大祭日 十二月十五日、春祭二月十七日、秋祭十一月二十三日  
 社殿坪数 本殿一・五坪・拜殿十二坪  
 境内地坪数 二千二百八十六坪  
 由氏子 百戸  
 緒数 太古より建築の神社であるが由緒創立年月共に不詳



益救神社

十七、益救神社  
 祭神 天津日高彦火々出見命  
 鎮座地 屋久町原七二一―二  
 大祭日 六月十五日、春祭二月十七日、秋祭十一月二十三日  
 社殿坪数 本殿一坪・拜殿六坪  
 境内地坪数 八百九十八坪  
 由氏子 百二十戸  
 緒数 本社は目下無格社に過ぎざるも往古は村社として古  
 来奉祀された、元官(藩)幣社即ち現在の県社たる益救神社の末社  
 であった。屋久島全島十八社中の一に相当する古社であったが、  
 益救神社が明治維新後藩幣社の社格を失い、県社に列するに至る  
 や、その後、時代の変遷に因り当社も又村社の社格を失って現在  
 の如く無格社となるに至れり。

十八、保食神社

倉稻魂神

屋久町尾之間字大山九七七—

大祭日 九月九日、春祭二月十六日、秋祭十一月二十三日

社殿坪数 本殿一・五坪・拜殿十二坪

境内地坪数 三千二十三坪

由氏子数 百五十戸

不詳なるも、本宮天照皇大神の御饌都神と坐す豊受大神を奉祀、創立は雄略天皇の二十二年、皇大神の神勅に依り丹波国比治の眞奈井原より、小田の原に迎え奉られしに基き、爾来此の宮の御饌殿として日別朝夕の大御饌を供進せらるるのである。

古老及び縁起考に因れば、何時の世にか部落人等集りて伊勢神宮に代参し、外宮に参拝の折、祢宜より此の神は百姓の神、即ち五穀の神、又牛馬を守る神様なることを聞き、分神を勧請して村の小高き処に祀る。しかし後に現在地に移し、今部落の氏神として奉祀するに至る。その御加護の為、当部落は五穀畜産繁昌するに至れり。部落民一同は一層信仰に怠りなく務め居れり。



保食神社

十九、小島神社

大山祇命・菅原道真公

屋久町小島字小島三九五番地

大祭日 一月二十五日、春祭二月二十一日、秋祭十一月二十七日

社殿坪数 本殿二・二五坪・拜殿六坪

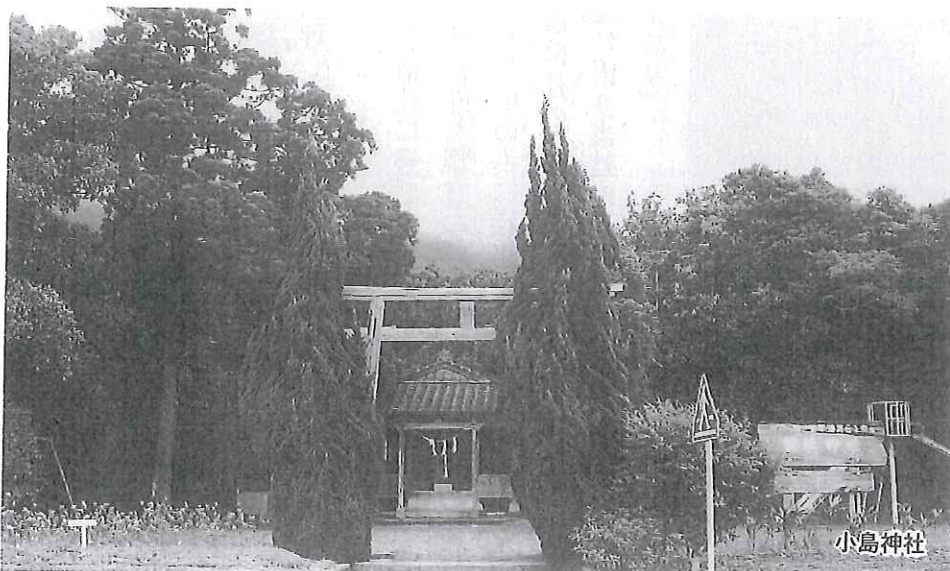
境内地坪数 一千百十七坪

由氏子数 三十戸

創立年

月日不詳なれども、往古より現在まで鎮座地を「神山」と通称し、応仁の末頃より一時社殿の荒廃を見たる結果、いつしか社記録起等を消失す。今、正殿に菅原道真公を祀り相殿に大山祇命を奉祀するも、他に配し祀れる神々ありと覚ゆれど、不詳なり。

棟札、其の他の明確なる社記等も所蔵せず。



小島神社

二十、八幡神社

譽田和氣命（応神天皇）

屋久町平内字大山四五八番地

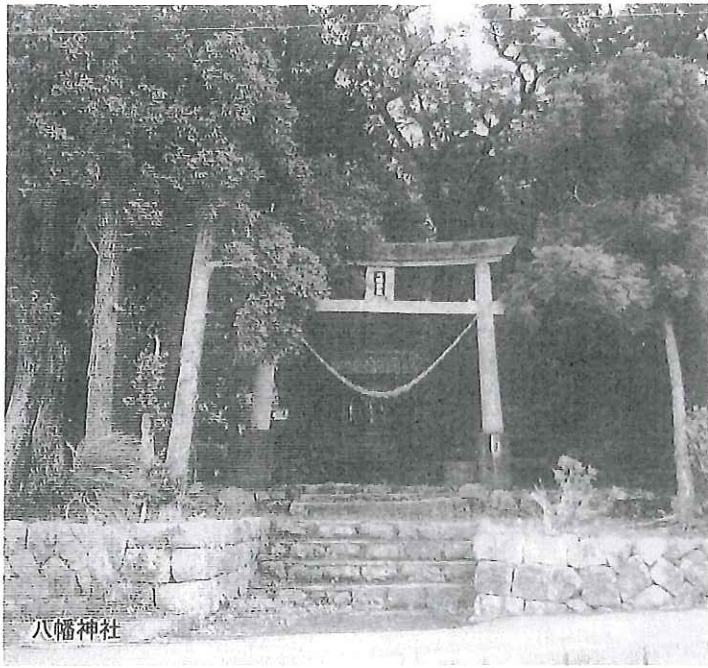
九月十五日、春祭二月二十日、秋祭十一月二十六日

本殿二・二五坪・拜殿十八坪

二百五坪

百戸、約三百人

当社草創年歴等不詳なり。村の入口上手道路の上にも由緒に触れず。棟札、社蔵文書、社記、古老の口碑等、参考となるべきものなし。



八幡神社

二十一、湯泊神社

明細書なし

大山祇命

屋久町湯泊

本殿二坪・拜殿九坪

創立年・由緒共に不詳

祭神 大山祇命  
鎮座地 屋久町湯泊  
大祭日 本殿二坪・拜殿九坪  
拜殿坪数 九坪  
境内地坪数 二坪  
氏子数 約三百人  
由緒 不詳



湯泊神社

二十二、中間神社

天津日高彦火々出見命・大山祇命

屋久町中間字上町七〇五番地

十二月九日、春祭二月十五日、秋祭十一月二十四日

本殿二・二五坪・拜殿六坪

一千五百八十九坪

六十戸、約百五十人

当社草創年歴等不明なり。村の上山中に鎮座也。棟

祭神 大山祇命  
鎮座地 屋久町中間字上町七〇五番地  
大祭日 十二月九日、春祭二月十五日、秋祭十一月二十四日  
社殿坪数 本殿二・二五坪・拜殿六坪  
境内地坪数 一千五百八十九坪  
氏子数 六十戸、約百五十人  
由緒 不明



中間神社

札、社蔵文書、社記等を所蔵せず。また  
 古老の口碑等参考となるべきものなし。

二十三、栗生神社

祭座地 天津日高彦火々出見命  
 鎮座地 屋久町栗生字門前一六九八番地  
 大祭日 二月二十五日、春祭二月十七日  
 社殿坪数 本殿九坪・拜殿九坪・神饌殿十坪  
 境内地坪数 六百六坪  
 氏子数 二百五十戸、約七百五十人



栗生神社

由緒 当社は屋久の三嶽五村社の其一つにして、創立年代  
 不詳なるも、県社益救神社に次ぎ 屋久島各神社に先立ち 創立せ  
 し神社也。

旧藩時代には祭米三斗を附おかれて例祭・新嘗祭等には益救神  
 社より出務の例ありしも、県治一変し、終に村祭の式に復する  
 も、社例に依り、例祭・祈年・新嘗の三大祭、亦、正・五・九月月  
 次祭に際しては、御神幸祭典奉務旧例あり。  
 三嶽は屋久の八重嶽の絶頂に宮之浦嶽・栗生嶽・永田嶽ありて  
 各一つの小祠あり。島民等、栗生嶽を指して栗生神社の奥の院と  
 云へり。